

?と!が生まれる 自然環境

伐採された木の枝などを、積極的にあそびや保育に活用することで、子どもたちのなかには、樹木に対するさまざまな思いが育っていきます。

監修＝大澤 力（東京家政大学教授）

自然を取り込む園庭作り vol.12

樹木への親しみをはぐくむ

執筆＝内野彰裕（東京都・東京ゆりかご幼稚園園長）

当園では、園庭樹木のせん定や、近隣の雑木林の間伐によって生じた木ぎれ・枝などを、できるだけ保育に取り入れるようにしています。園庭の小枝を拾ってままごとに使ったり、たき火をするために枝を拾いに出かけたりということはもちろん、あそびの素材から運動会の表彰状に至るまで、さまざまな場面で木を多用しています。木はそのぬくもりを感じながらあそぶことによって、心を落ち着かせ、いやしを与えてくれます。既製品にはない「人の思い」と「木の優しさ」が合わさった「心」を、子どもや保護者に届けたいという思いもあります。

子どもたちが慈しんできた木をせん定するときは、「それまで自分たちを見守ってくれた」という親しみや感謝という特別の感情を起こさせてくれます。例えば、園のシンボルツリーのメタセコイアをせん定した枝は、5歳児のバードコール*に生まれ変わり、日常のあそびや、園外保

育時に欠かせないツールになります。こうして木が形を変え、子どもたちの手に包まれ、あそびや活動に生かされるという一連の流れは、自然とのつながりを身近に感じさせてくれるのに効果的です。

また、数年前からドングリを育てて森を作る活動を行っています。雑木林や公園で拾ったドングリを自分たちの鉢に植えて園で育て、卒園後は各家庭で成長を見守り、3年後、園に植樹します。花や野菜を育てることはあっても、木を育てるという体験はあまりないものです。そして、身近なドングリから根が生え芽が出てきて自分たちと同じように大きく成長していく姿には、単なる「風景の一部としての木」ではなく、「生命をもつ木」として、より身近に感じ、親しみをはぐくんでいくのではないかと考えています。

※バードコール＝鳥のさえずりのような音を出す道具。



園庭でひときわ目をひく、園のシンボルツリー、メタセコイア。



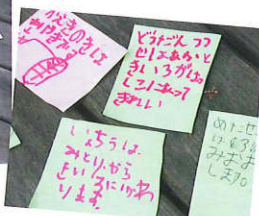
園庭の木に付けられた名札は、輪切りにして表面を白く塗った木に、子どもたちが名前や絵をかけたもの。



運動会の表彰状は、1枚1枚、間伐材を切って削って磨いて作ったもの。



押し葉(花)で作ったかるた。読み札にはその葉の特徴が。



※このページでは、「いつでも自然とふれあえる園庭」を目指して、保護者と子どもと保育者で園庭改造に乗り出した東京ゆりかご幼稚園の実践を、1年間で紹介しました。